

ひろしまアーツカレント

プロジェクト（1）「キャンパスにアートと複数種の共生空間としての里山を創造する」

Satoyama in Movement

ここに根をはり、共に生き、栄える Rooted here, we live and flourish together



約 30 年前、広島市の一部の山間部を切り開いて造られた
広島市立大学のキャンパス。

ここにはもともと、棚田や雑木林が広がり、人が動物や
植物、土や水など異なる時間軸で生き、存在するもの
たちと歩調を合わせながら暮らす里山がありました。

しかし、さまざまな場所から大学に赴き、日々、研究や
制作、勉強や仕事に追われる私たちは、ここにあった
里山や、今でもすぐそばで農業を営んでいる農家さん、
または、同じ時間や空間を共有している人間以外の生き物
やものたちについて思いを巡らすことはほとんどあり
ません。そんな私たちは、まるで根をはらず、水面を
浮遊している浮き草のようです。

一時的だったとしても、今いる場所と関わり、ここに根を
はり、ここで暮らしてきた人々や人間を超えたものたち
が持っている知恵を学び、それぞれの環世界を共有しな
がら生きる。そんな内にも外にも開かれた、複数種が
共生する学びの場、変容しつづける里山を作ること
を目指して、アートプロジェクト『Satoyama in Movement
—ここに根をはり、共に生き、栄える』を始動します。

＼ 2025 年度 /
受講者募集

6/26 [木]

応募締め切り

お申込はこちらから



entry

『Satoyama in Movement —ここに根をはり、共に生き、栄える』の初年度となる今年は、次年度実施予定のキャンパスにある空き地を利用した農空間作りの構想段階として、フィールドワークを通してキャンパス周辺の植生、地形、地質について学び、アートの視点からディスカッションやリサーチを行い、最終的には作品を制作し、展示をします。**エコロジー**に関心のある方や、自身の活動や作品制作のために**リサーチ力、構想力、コミュニケーション力**を伸ばしたい方はぜひ奮ってご応募ください。

募集人数

8名

(学生、一般、広島県内外を問わず)

参加要件

下記のプログラムを1年を通して受講できること

実施場所

広島市立大学キャンパスと大学周辺地域

受講料

無料

お申し込み



Instagramでも公開しています

プロジェクト代表

長坂有希 (アーティスト / 広島市立大学芸術学部講師)

プロジェクトコーディネーター

堀口智尋 (広島市立大学芸術学部現代表現領域4年)

*受講者の選考結果は、可否に関わらずご登録いただいたメールアドレスにお送りします。6月30日(月)までに結果をお知らせする予定です。

熊原康博

(自然地理学 / 広島大学教授)

1975年東京都生まれ。広島県在住。ヒマラヤや日本をフィールドとして、地形や地層の変形から活断層の活動史を復元する変動地形学が専門。身近な地域を対象に、地形と人々の暮らしの関係を読み解く活動も行う。著書に『Surface Ruptures Associated with the 2016 Kumamoto Earthquake Sequence in Southwest Japan』(Springer社)、『東広島地歴ウォーク』『西条地歴ウォーク』(共にレタープレス社)など。

吉田晴彦

(国際関係論、国際協力論、平和研究、分類学、生態学、分子生物学、フォトグラファー / 広島市立大学国際学部教授)

1965年大阪府生まれ。広島市在住。近年は野草、昆虫、野鳥など、私たちにとってごく身近な生き物たちがどのように世界と結びついているのか、それらがどのように現代世界を見る目を養うことにつながるのかという『身近な生き物と国際関係』(Amazon kindle)が研究テーマである。高精細な写真を撮影しながら、社会科学と自然科学とを結びつける視点を大切に研究している。

吉田勝信

(採集者・デザイナー・プリンター / 吉勝制作所)

山形県を拠点にフィールドワークやプロトタイプングを取り入れた制作を行う。近年の事例に海や山から採集した素材で「色」をつくり、現代社会に実装することを目的とした開発研究「Foraged Colors」や超特殊印刷がある。趣味はキノコの採集および同定。

石倉敏明

(人類学者 / 秋田公立美術大学アーツ & ルーツ専攻・大学院複合芸術研究科准教授)

1974年東京都生まれ。アジアや日本各地でのフィールド調査をもとに、複数種をめぐる芸術人類学研究、アーティストとの共同制作、展示企画を行う。2019年、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際芸術祭日本館展示「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」に参加。共著書に『Lexicon 現代人類学』『〈動物をえがく〉人類学 人はなぜ動物にひかれるのか』など。

石谷治寛

(美学芸術学 / 広島市立大学芸術学部准教授)

十九世紀フランス美術と視覚文化やアナキズムに関する学術論文を発表。外傷記憶を扱う現代芸術に関する論考多数。また、メディア芸術の保存とアーカイブに関するプロジェクトにも取り組んできた。広島では都市への芸術介入を調停する人材育成を目指すHACH(広島芸術都市ハイク)の運営をはじめ、文化メディアエーションについて考察している。

長坂有希

(アーティスト / 広島市立大学芸術学部講師 / 香港城市大学クリエイティブ・メディア学科博士課程研究員)

1980年大阪府生まれ、広島県在住。日常の暮らしの中で出会う事象を綿密にリサーチし、自らの体験や記憶を織り交ぜながら物語を編み、語ることを通して、物事の関係性の再定義や、周縁のものたちからの視点を提示し、異なる人々や生物のあいだに存在している権力構造の再考を試みている。

お問い合わせ

広島市立大学地域共創センター(研究推進・産学連携グループ)

TEL : (082) 830-1764 E-mail : hach_info@icloud.com

プロジェクト公式 Instagram

@satoyama_in_movement



SIM
satoyama in movement